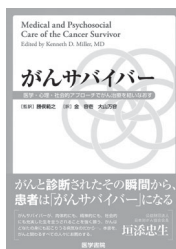


書評

[評者]

田村和夫

福岡大学教授／腫瘍・血液・
感染症内科学



がんサバイバー

医学・心理・社会的アプローチで
がん治療を結いなおす

Kenneth D. Miller 原書編集

勝俣範之 監訳

金 容壺・大山万容 訳

A5 頁464 2012年

定価 4,200 円(本体 4,000 円+税 5%)

[ISBN978-4-260-01522-6] 医学書院刊

がんサバイバー，日本ではまだ聞き慣れない言葉である。本書では，このなじみのない言葉を明確に定義し，その概念を記述するに留まらず，心身の急性期・晩期障害を詳細に記載している。そればかりか医療の現場では語られない，むしろ避けて通ってきた性や子育て，家族・介護者の問題を正面から取り上げている。編者の Miller 医師自身，がんサバイバーの妻をもち，自らの体験が本書に取り上げたがんサバイバーの問題・課題をリアルなものにしている。また，本書の意を伝えるため，わかりやすく日本語訳された金容壺，大山万容両氏ならびに監訳者である勝俣範之氏に敬意を表したい。

本書は，がんが診断されたすべてのステージの患者，すなわちがんが診断されて治療を受けている患者ばかりでなく，治療終了者ならびに患者家族や介護者をすべて包含して話を進めている。日本では毎年 70 万人を超える人ががんに罹患し，35 万人ががんによって死亡している。単純に計算すれば，毎年 35 万人のがんサバイバーが出現することになる。もちろん複数のがんをもっている例や他の疾患で亡くなる患者もいるので，

この数がそのまま実数にはならないが，それぞれの患者に家族や介護者がいるわけで，それにしても想像を絶するがんサバイバー数となる。

われわれ医療者は基本的にはがんの診断を的確に行い，治療方針を決定し，支持療法を駆使してがんをターゲットとした治療を完遂することが求められている。一方で，治療の代償というべき身体的な後遺症や心理・社会的・霊的な影響に対しては，十分手を差し伸べることができていない。まさにこれらを行政レベルで反映したものが，2012 年 6 月閣議決定した「第 2 次がん対策推進基本計画」であり，その重点的課題には，「がんが診断された時からの緩和ケアの推進」，就労問題を含め「働く世代や小児へのがん対策の充実」である。

本書は，古くて新しい問題であるがん患者，がん生存者の問題を漏らすことなくエビデンスに基づいて論じ，その対処法についても記載した実践的な側面ももっており，がんの専門家，がんに関わる医療者，家族，介護者ばかりでなく，行政，学校，会社や団体の健康管理者，執行部の方々にぜひ読んでいただきたい良書である。